

#### 4 遺跡の残存状況

今回の発掘調査の成果および、歴史・地理的環境から、調査対象となった川骨遺跡の範囲の周辺にはさらに遺跡が広がる可能性が考えられる。

川骨遺跡においては、V層を弥生時代～古墳時代の包含層として扱った。土器集中遺構が検出された2地点は川内川と、川内川が諏訪山に沿って流れる細い支流とに囲まれ、遺跡の西側から八間川にかけて、川骨遺跡と同じような地形が続いているとすれば、同時代の土器集中遺構が存在する可能性が考えられる。現在の地形・用水路の配置およびV層上面の検出状況から考えると、川内川は現在よりも80～100mほど南側の位置を流れており、支流が諏訪山の裾をめぐって市道付近を流れていると考えられ、自然科学分析の結果や、川骨遺跡周辺の江の口部落で昭和40年代に井戸を掘るために地表面から5mほど掘り下げたところで多量の木片が出土したということから考えると周辺は湿地としての様相を呈していたと思われる。このことから、自然堤防のラインに沿って遺跡の東西から、弥生時代後期後半～古墳時代初頭頃の遺構および遺物が検出される可能性がある。

また、川骨遺跡周辺は江戸時代に武家屋敷があった場所であり、現在でも当時のものと思われる石垣が残っている家屋が多くある。それらの場所には、川骨遺跡と同様に中世～近世の遺構および遺物が埋蔵されている可能性が高い。加えて、今回4地点とした場所は残存状況は悪いが、遺構が検出されている。このことから、遺跡の東西にある、現在水田として利用されていない土地に関しても、川骨遺跡で検出された溝の続きなどが残存している可能性があると考えられる。

以上のことから、今後は周知の遺跡として遺跡登録されていない場所についても、諸開発に伴い事前調査を行う必要がある。



遺跡の残存状況

# 西之城遺跡

## 第4章 西之城遺跡の調査

### 第1節 調査経過（日誌抄）

調査経過は、日誌抄をもってこれに変えることしたい。

平成20年12月～平成21年3月（発掘調査）

- ・遺跡内環境整備
- ・A-3区, B-2・3区, C-2・3区, D-3区, E-2・3区, F-2区, G-2・3・4区, H-3・4区, 挖り下げ。
- ・遺物出土状況及び調査範囲平板実測。
- ・土層断面図作成。
- ・調査終了区の重機による埋め戻し。

### 第2節 調査の方法と成果

#### 1 発掘調査の方法

発掘調査は、道路建設用センター杭No.240とNo.245を基準に、10m間隔の区画を設定し、東から西へ1・2・3・4…列、北から南へA・B・C・D…列と呼称した（第2図）。本調査は、3地点において実施した。19トレンチを扯張し、表土を重機で取り除いた後、人力でⅡ層からⅢ層までを掘り下げた。

遺構は検出されなかったが、Ⅱ層において、中世後半から近世に相当する遺物が出土した。

#### 2 整理作業の方法

整理作業については、平成22年4月～平成23年3月まで、南九州西回り自動車道整理作業事務所において行った。整理作業の工程は次の通りである。

4月・5月 図面整理、注記、接合、選別、分類

6月・7月 土層断面図作成、周辺地形図及びグリッド配置図作成、実測、トレース、レイアウト

8月・9月 観察表作成、原稿執筆、写真撮影

#### 3 出土遺物の分類

出土遺物は、Ⅱ層から、中世後半から近世に相当する陶磁器が出土した。Ⅱ層内の文化層ごとの細分化は困難であったため、掲載にあたっては、種別や器種、製作方法等を参考に時期設定を行った。

中世相当の遺物 糸切り底の土師器、瓦質土器、白磁、青磁、青花

近世相当の遺物 肥前系陶器、土師質土器、簪、石臼

### 第3節 層序

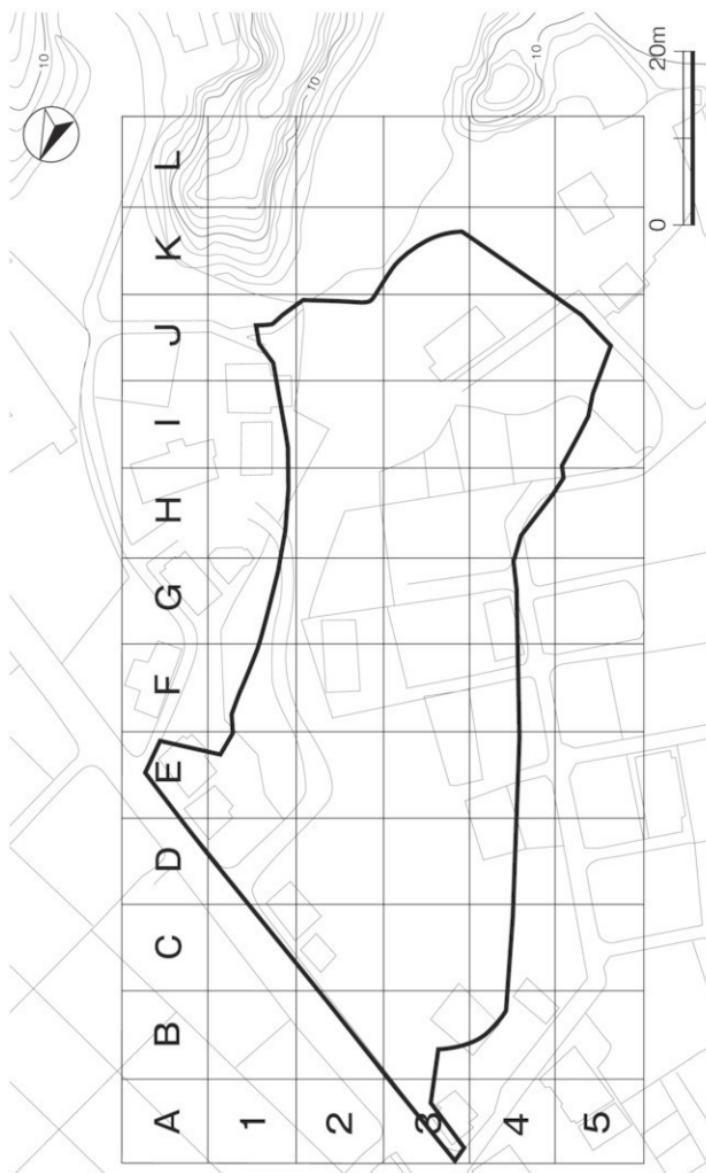
西之城遺跡の層位は、以下のように基本的に3層に分層できる。I層は、耕作土及び宅地造成土

0 100m

第1図 西之城遺跡路線図



第2図 西之城遺跡周辺地形図およびグリッド配置図



である。Ⅱ層は黒褐色の有機質を含む明褐色土層で、中近世の包含層である。Ⅲ層はシラスである。  
(第3・4図参照)

I層	耕作土、宅地造成土	明赤褐色土
II層	中近世の包含層	明褐色土
III層	シラス	明褐色火山灰

## 第4節 調査の成果

### 1 中世～近世の調査

#### (1) 調査の概要

3地点において、19トレンチを拡張して調査を行ったが、遺構は検出されなかった。

遺物はⅡ層で、中世から近世に相当する遺物が出土した。

#### (2) 遺物

中世に相当する遺物としては、土師器、瓦質土器、白磁、青磁、青花が、近世に相当する遺物としては、肥前陶器、土師質土器、簪、石臼が出土した。

### 中世の遺物（第5・6図）

#### 土師器

1～10は土師器である。すべて底部の切り離しは糸切りである。

1～3は皿である。器高2cm未満のものを皿と分類した。1は体部が直線的に立ち上がるるものである。2は口縁部がわずかに外反する。3は1・2に比べると口径が9cmとやや大きいものである。内面の一部に煤が付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。

4・5は器高が2cm以上のもので、壺として分類した。4は内底面が盛り上がるもので、外面体部下位はヘラケズリを施した後、糸切りされている。5は、体部がわずかに内湾しながら斜めに開く形状を呈するものである。

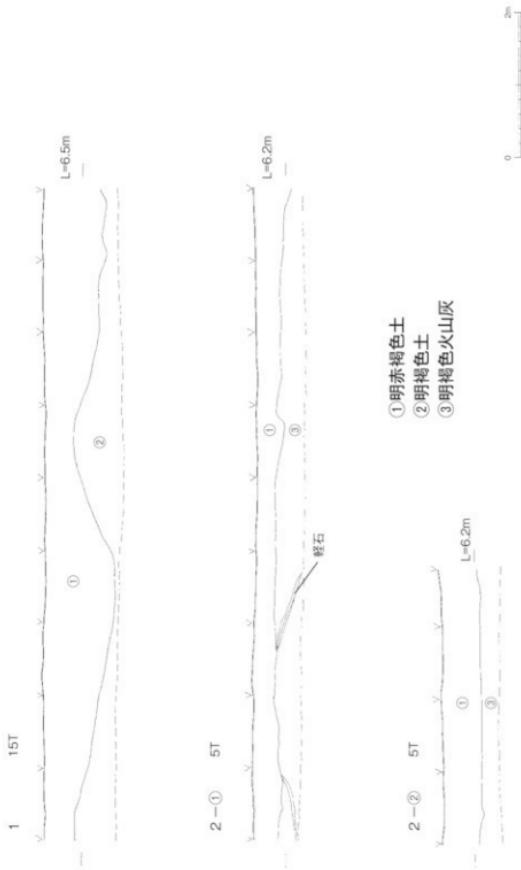
6・7は碗または壺の底部である。

8は鉢である。体部は曲線的に立ち上がり、口縁部は強く内湾する形状を呈する。体部と底部の境は、糸切りの後へラケズリにより面取りされている。内外面とも赤色顔料が塗布されている。

9・10は香炉である。9は糸切りで底部を切り離した後、体部と底部の境をヘラケズリで面取りし、その後3か所に脚をつけている。10は脚部分である。

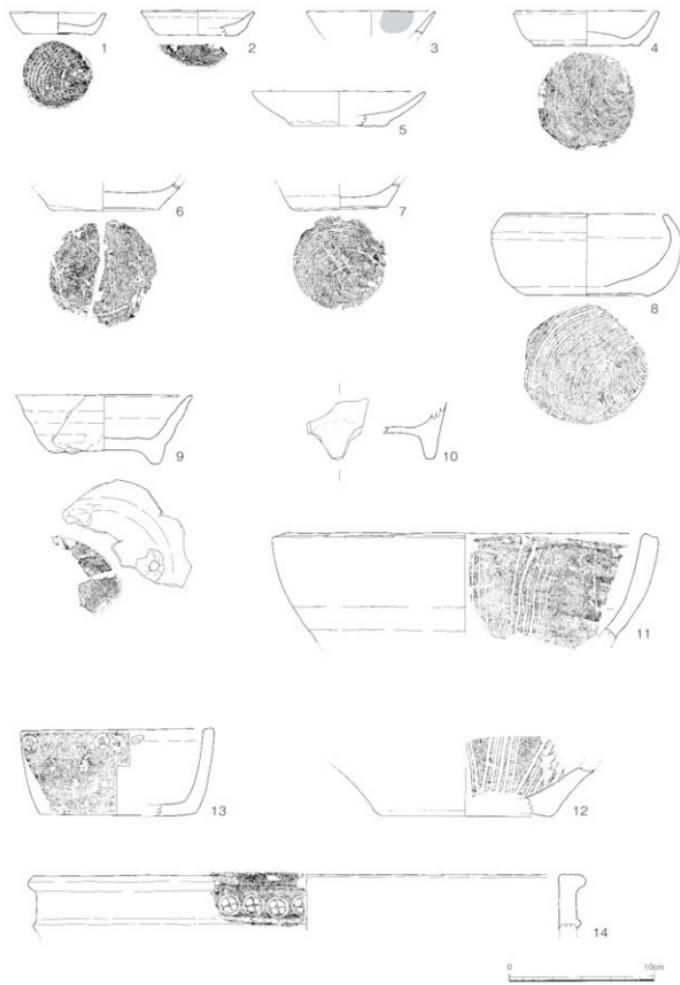
11～14は瓦質土器である。11・12は擂鉢で、同一個体の可能性が考えられるものである。内面には5条1単位の擂り目が施される。13は鉢、14は深鉢形の火鉢である。13は蓋の可能性も考えられる。14は外面に○に十のスタンプが刻印されたものであるが、島津氏の家紋との関連はないものと思われる。

第3図 土層断面図 1

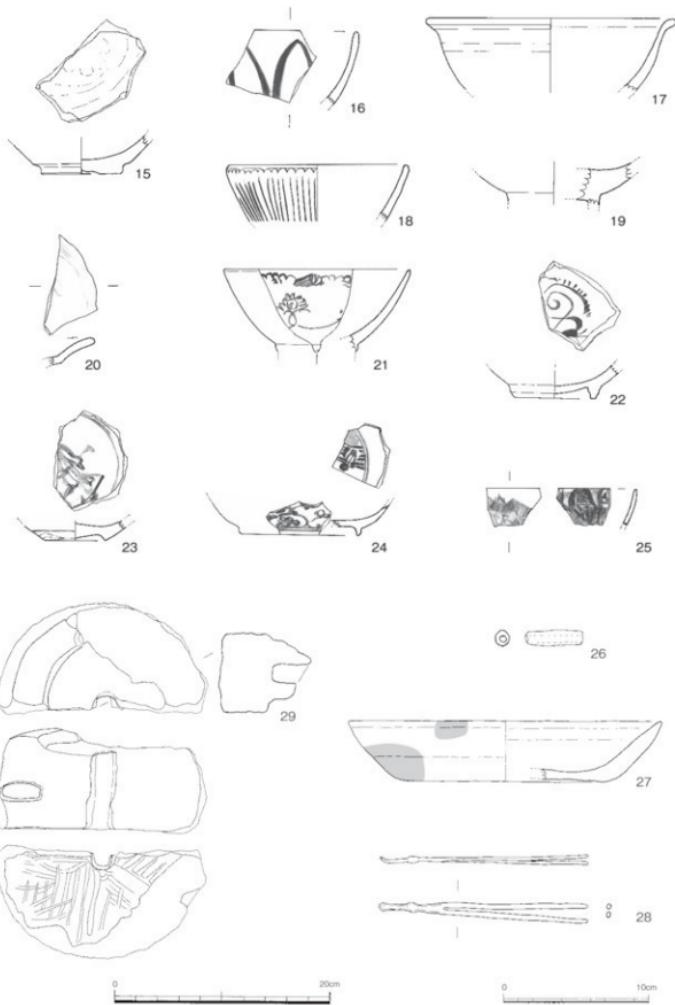




第4図 土層断面図2



第5図 中世～近世の出土遺物 1



第6図 中世～近世の出土遺物2

## 白磁・青磁

15は白磁である。口縁部が欠損しているが、玉縁口縁になるものと思われる。外面の釉は腰部までかかり、以下は露胎する。

16～20は青磁である。16～18は楕の口縁部である。16は外面に蓮弁文が片彫りで描かれるが、蓮弁の中央に稜はみられない。17は口縁部が外反するものである。口縁端部は丸くつくられる。18は外面に線描蓮弁文が描かれるもので、剣頭が蓮弁の一部として意識されずに描かれている。19は楕の底部である。器壁は厚手の大振りである。高台内底の釉は輪状に搔き取られる。20は模花皿である。

## 青花

21～24は青花である。21・22は蓮子碗である。21は漳州窯系のもので、呉須の発色が鈍い。22は景德鎮窯系のものである。高台内底面中央に砂粒が付着している。窯詰め時のものと思われる。23・24は皿である。23は葵筋底を呈するものである。漳州窯系のものである。24は薄手で、欠損しているが端反口縁を呈するものと思われる。外面には唐草文が描かれる。景德鎮窯系のものである。

## その他の遺物

25は肥前陶器で、碗の口縁部である。褐色の素地の上に白泥により打ち刷毛目が施されるものである。

26は土製品の土鍤、27は土師質土器の焰熔である。どちらも近世の範疇で取り扱ったが、中世の可能性も考えられる。27の底部の切り離しは不明で、切り離し後体部との境をヘラケズリにより面取りしている。

28は簪である。片端に耳かきがつくなっている。

29は石膏である。石材は凝灰岩である。

種類	番号	出土地	直径 (cm)	高さ (cm)	基部	種別	形状	色調	測定 (cm)				測定	測量	備考
									口径	底径	高さ	右側	左側		
1	1 3 瓢	62	II	10.8	口縁	口縁	口縁	赤褐色	6.5	4.8	15	—	—	ナゾ ナゾ	表面赤褐色
2	2 3 瓢	90	II	10.8	口縁	口縁	口縁	赤褐色	7.8	5.4	17	○	○	ナゾ ナゾ	表面赤褐色 表面の石けんむき
3	3 3 瓢	138	II	10.8	口縁	口縁	口縁	赤褐色	9.0	—	—	○	○	ナゾ ナゾ	表面の石けんむき
4	4 3 瓢	44	II	10.8	口縁	口縁	口縁	淡黄褐色	10.0	7.2	24	○	○	ナゾ ナゾ	表面の石けんむき
5	5 3 瓢	74	II	10.8	口縁	口縁	口縁	淡黄褐色	12.0	6.6	24	○	—	—	表面赤褐色
6	6 3 瓢	137.118	II	10.8	口縁	口縁	口縁	淡黄褐色	—	7.4	—	○	○	ナゾ ナゾ	表面赤褐色 表面の石けんむき
7	7 3 瓢	71	II	10.8	口縁	口縁	口縁	淡黄褐色	—	6.5	—	○	○	ナゾ ナゾ	表面赤褐色
8	8 3 瓢	131	II	10.8	口縁	口縁	口縁	淡黄褐色	—	11.0	8.6	56	○	ナゾ ナゾ	表面赤褐色 表面の石けんむき
9	9 197	10.12	—	—	口縁	口縁	口縁	明黄褐色	12.0	7.0	47	○	○	ナゾ ナゾ	表面赤褐色
10	10 3 瓢	97	II	10.8	口縁	口縁	口縁	褐色	—	—	—	○	○	ナゾ ナゾ	表面赤褐色

種類	番号	出土地	直径 (cm)	高さ (cm)	基部	種別	形状	色調	測定 (cm)				測定	測量	備考
									口径	底径	高さ	右側	左側		
11	11 2 瓢	41	II	10.8	口縁	口縁	口縁	淡黄褐色	—	—	—	—	—	—	12と同一個体
12	12 3 瓢	50	II	10.8	口縁	口縁	口縁	淡黄褐色	—	—	—	—	—	—	—
13	13 2 瓢	114	II	10.8	口縁	口縁	口縁	淡黄褐色	—	—	—	—	—	—	16世紀代 内側に墨付箋 内側に印伝文
14	14 3 瓢	117	II	10.8	口縁	口縁	口縁	淡黄褐色	—	—	—	—	—	—	16世紀代 外側に印伝文
15	15 87	—	—	—	口縲	瓶	瓶	淡黄褐色	—	—	—	—	—	—	—
16	16 3 瓢	96	II	青磁	瓶	瓶	瓶	灰褐色	—	—	—	—	—	—	16世紀代 上部少墨付箋
17	17 3 区	72	II	青磁	瓶	瓶	瓶	灰褐色	—	—	—	—	—	—	16世紀代 上部少墨付箋
18	18 87	—	—	—	青磁	瓶	瓶	灰褐色	—	—	—	—	—	—	16世紀代 上部少墨付箋
19	19 197	20	—	—	青磁	瓶	瓶	灰褐色	—	—	—	—	—	—	16世紀代 上部少墨付箋
20	20 3 瓢	106	II	青磁	瓶	瓶	瓶	灰褐色	—	—	—	—	—	—	16世紀代 表面

探査番号	地図番号	出土区	取り上げ番号	層位	種別	器種	場所	測量 (m)			地盤の色調	地表の色調	地輪	時間	備考
								OSR	東西	南北					
6 回	21	3 地点	152	II	青花	瓶	津州窯	12.8	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	11世紀後半～17世紀初期	
	22	3 地点	142	II	青花	瓶	影德窯	—	5.6	—	灰白色	透明釉	高台盤～高台内面無釉	11世紀後半～17世紀初期	鈴印有り
	23	19 T	13	—	青花	瓶	津州窯	—	4.2	—	灰白色	白花瓶の上に	此花加絵	11世紀後半	墨書き
	24	3 地点	69	II	青花	瓶	影德窯	—	8.0	—	灰白色	透明釉	進行中施絵	11世紀後半	小野分類目録
	25	8T	—	—	海苔	瓶	猪口	—	—	—	灰色	白化現象に	残存部全面施釉	11世紀後半	内側打ち削り目

探査番号	地図番号	出土区	取り上げ番号	層位	種別	器種	場所	測量 (m)			地盤の色調	地表の色調	地輪	時間	備考
								OSR	東西	南北					
6回	26	3 地点	148	II	土製品	管状土錐	褐色	19	—	—	褐色	褐色	褐色	11	

探査番号	地図番号	出土区	取り上げ番号	層位	種別	器種	場所	測量 (m)			地盤の色調	地表の色調	地輪	時間	備考
								OSR	東西	南北					
6回	27	19T	6	—	土蔵質土器	埴輪	—	21.6	136	42	に赤い變色	—	外面・内面間に平行溝	—	
	28	8T	—瓶	—	金属製品	轆	—	—	—	14.4	—	—	—	耳かき付、重さ：92g 留溝は空気	
	29	3 地点	—瓶	II	石製品	石臼	—	—	19.4	7.3	—	—	—	—	石材・礫状岩

## 第 5 節 総括

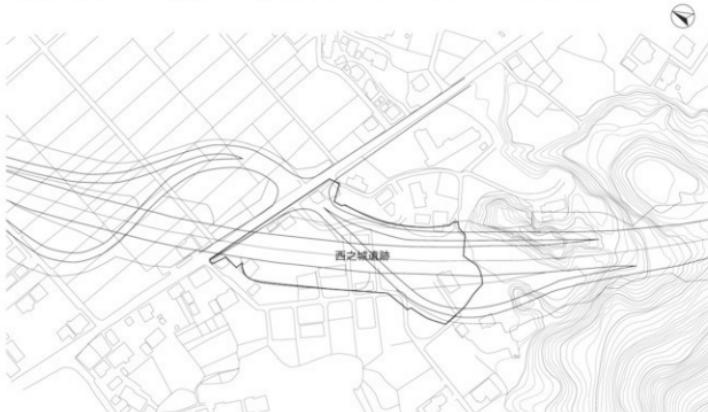
今回の調査では、遺構は検出されなかった。遺物は、第3地点のII層において、中世～近世に相当する遺物が出土した。

中世の出土遺物については、11世紀後半から12世紀前半に相当する白磁碗が1点出土しているものの、青磁・青花については中世後半の5世紀代～16世紀代に相当する資料であり、遺跡の中心年代はこれらの年代に一致すると考えられる。

しかしながら、土器をみると、ローリングを受けている資料等も見られ、原位置を留めていない可能性も考えられる。

近世については、遺物が少ないとみて詳細は不明である。

遺跡の残存状況については、本遺跡を含め西之城遺跡・東之城遺跡の範囲として捉えられているが、周辺遺跡はすでに消滅しており、遺跡は広がらないと考えられる。(下図参照)



遺跡の残存状況図

# 川幡遺跡

## 第5章 川幡遺跡の調査

### 第1節 調査の経過（日誌抄）

平成20年度

2月9日 調査のための環境整備。

2月10日～17日 グリッド杭設定、表土剥ぎ、先行トレンチ掘り下げ、土層断面実測。

2月18日 棚田石組み及び周辺掃除、実測、写真撮影。

2月19日 表土剥ぎ、B-5区 Ia・II層掘り下げ。

2月20日～23日 表土剥ぎ、B-5区 Ia・Ib層掘り下げ、B-8・9 I・II層掘り下げ。

2月24日 B-5区 Ia・II層掘り下げ、遺物取り上げ、コンタ図作成。

3月4日～6日 B-4・5区 I・II層掘り下げ。

3月10日 B-4・5区 II・III層掘り下げ。

3月11日・12日 C・D-3区 棚田石組み内面調査、重機による埋め戻し

平成21年度

11月4日 調査のための環境整備。

11月5日・6日 A～C-11～14区、Ib層掘り下げ。

11月9日～13日 A～C-11～14区、Ib層、II層以下掘り下げ。

調査範囲平板実測、写真撮影、重機による埋め戻し。

### 第2節 発掘調査の方法と成果

#### 1 発掘調査の方法

道路建設用センター杭No.240とNo.245を基準に、10m間隔の区画を設定し、西から東へ1・2・3・4…列、北から南へA・B・C・D…列と呼称した（第2図）。

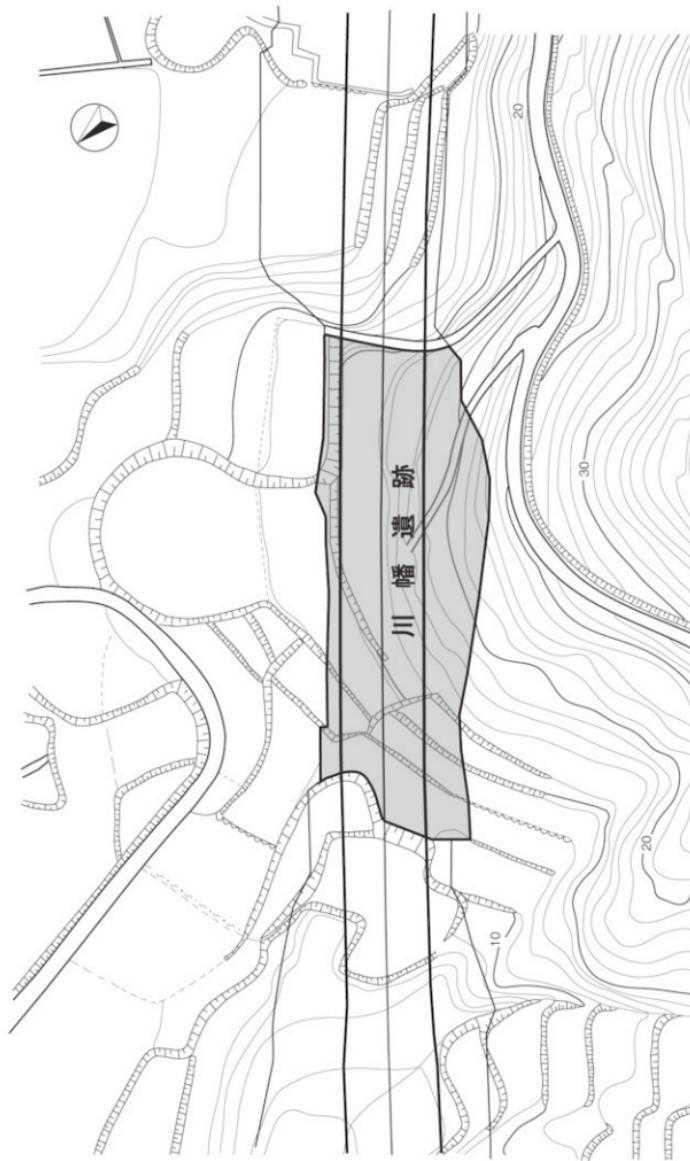
平成20年度の調査は、調査区域内の草払い等の環境整備を最初に行なった後、先行トレンチを7か所設定し、包含層の有無や広がりを把握した。表土は重機で取り除き、II層からIII層までは人力で掘り下げた。その結果を踏まえ、B-4・5区、とA・B-8・9区の2か所において本調査を行なった。表土は前述と同様に取り除き、II層からIII層までは人力で掘り下げた。2か所とも遺構は検出されなかつたが、B-4・5区で包含層が確認され、古代の遺物が出土したので、写真撮影と図面作成を行い、記録保存を行なった。また、幕末から明治初期にかけて構築されたという棚田が現在は耕作が行われていないものの、良好な状態で残存していたので、調査区内の石組みの写真撮影と図面作成を行い、記録保存を行なった。

平成21年度の調査は、A～C-11～14区において実施した。表土を重機で除去し、II層からIII層を人力で掘り下がたが、遺構・遺物は検出されなかつた。

#### 2 整理作業の方法

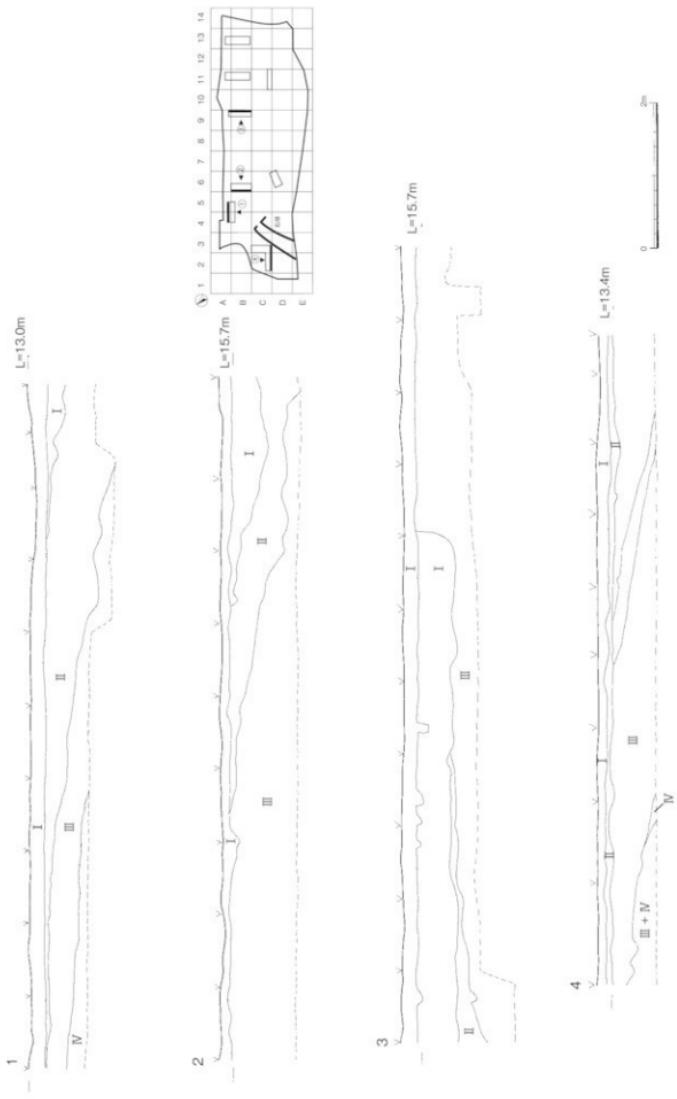
整理作業については、平成22年4月～平成23年3月まで、南九州西回り自動車道整理作業事務所において行なった。整理作業の工程は次の通りである。

第1図 川幡遺跡路線図 (S=1/1000)



第2図 川幡遺跡周辺地形図およびグリッド配置図





第3図 土壌断面図

- 4月・5月 図面整理、注記、接合、選別、分類  
6月・7月 土層断面図作成、周辺地形図及びグリッド配置図作成、実測、トレース、  
レイアウト  
8月・9月 観察表作成、原稿執筆、写真撮影

### 3 出土遺物の分類

出土遺物は、II層から、古代に相当する土師器、須恵器が出土した。また、I層から、近世の陶器と古鏡が出土している。分類は、時代と種別、器種をもとに行った。

### 第3節 層序

川幡遺跡の層位は基本的に4層に分層できる。I層は棚田や畠として利用されていた旧耕作土である。II層は上位にI層の水田基盤と考えられる硬化した面が見られ、マンガン粒と礫を多く含む。下位は古代の遺物包含層である。III・IV層は火山灰や安山岩が風化した埴土で、安山岩礫を多く含む。(第3図参照)

### 第4節 調査の成果

#### 1 古代の調査

- (1) 調査の概要  
B-4・5区において、II層より古代に相当する遺物が42点検出された。遺構は確認されなかった。  
(2) 遺物  
出土遺物は、総数42点で、古代に相当する土師器の椀・壺・高壺・甕、須恵器の壺が出土した。その中から、5点を掲載した。

#### 須恵器（第4・5図）

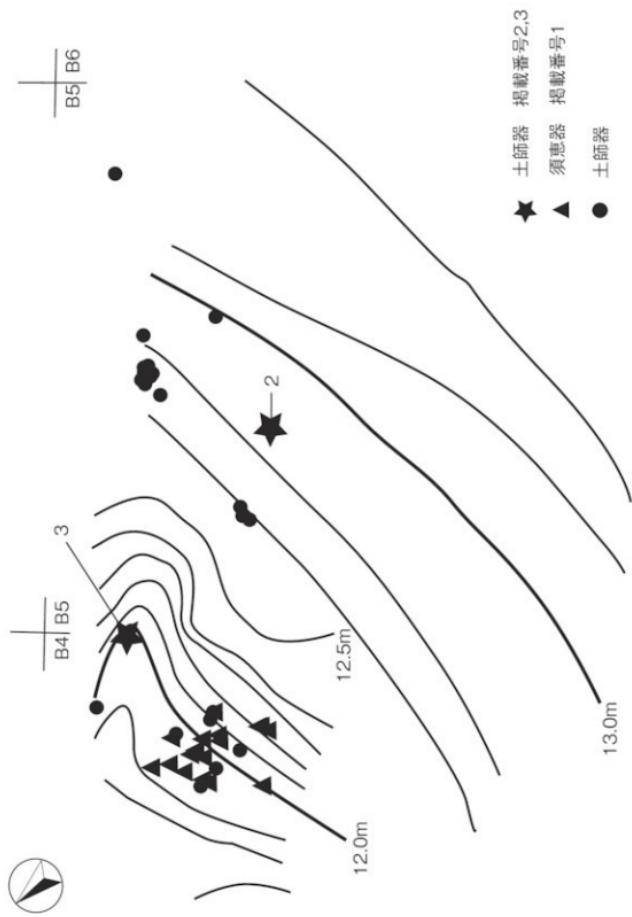
1は須恵器の壺である。B-4区において出土した。出土状況は緩やかな斜面で、近隣に散乱する状況であった。接合を試みたところ、体部が一部欠損しているが、ほぼ完形に復元することができた資料である。1点のみの出土である。全体の形状は、肩部はあまり張らず丸みをおび、切り出しでつくられた耳が2か所付く。外面肩部から胴部にかけては斜位のタタキ目が残り、頸部から口縁部は、ナデ調整、胴部下位はヘラケズギが施される。内面と内底面には、小石を布状のものでくるんだ工具による円形の当て具痕が残る。また外底面には車輪文の一部と思われるタタキ目が観察される。

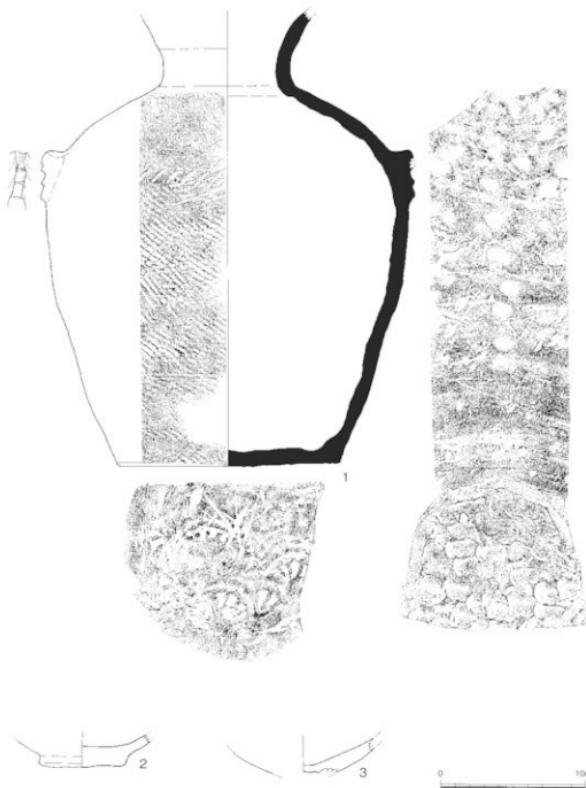
#### 土師器（第4・5図）

主にB-4・5区において出土した。緩やかな斜面上に出土している。土師器は約24点出土しているが、比較的良好に復元できた2点を図化した。

2は壺である。底部は充実高台ほどではないが、柱状を呈する。3は高壺である。口縁部と脚部は欠損しているため全体の形状は不明である。

第4図 古代遺物出土状況



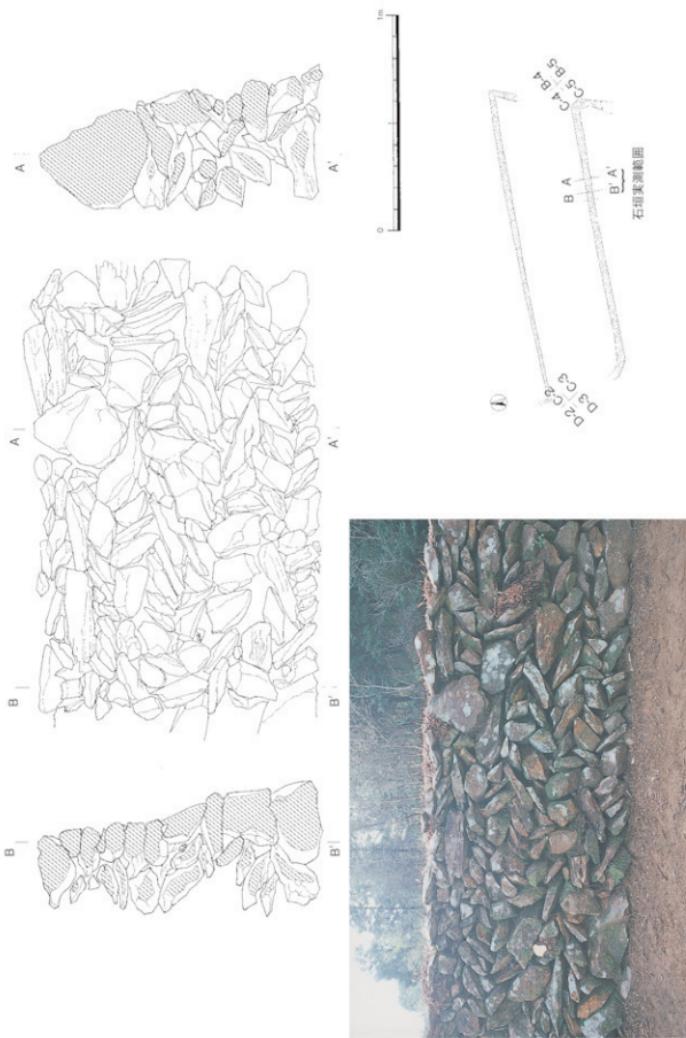


第5図 古代の出土遺物

古代遺物観察表

番号	番号	出土区	発見場所	種類	形状	表面	色調	測量(㎝)			加工	地成	備考
								上口	底	高さ			
1	B-4	37	II	腹巻器	直	織目-粗目	灰黄色	—	15.4	—			
2	B-5	1	—	土師器	环	底部	浅黄褐色	—	6.0	—	○	ナデ	ナデ
3	B-5	21	—	土師器	高环	底部 (内)織目	—	—	—	—	○		赤色の石粒含む

第6図 榎田石組み実測図





第7図 近代以降の出土遺物

## 2 近世以降の調査

### (1) 棚田（第6図）

調査区内に残る石組みと地形により、大小7枚の水田が棚田の形状で作られていたようである。この棚田は近隣地域の住民や地権者からの聞き取り調査により、幕末から明治の初期にかけて構築されたことが推定される。この棚田は調査区背後にある丘陵より湧水を用水路で導入して利用したが、湧水が枯渇したことくわえ、国の減反政策や後継者不足のために昭和50年代頃には耕作が行われなくなったようであるが、地域の生産活動の歴史を示すものとして、また、当時の構築技法を記録するため石組みが比較的良好に残存しているC-4区の一部を図化した。

石組みは調査区背後にある丘陵の斜面に豊富にある安山岩礫を利用していている。個々の礫には加工がほとんどされず、隙間の形状に合わせて礫を選んで組み込んでいるもの、部分的に飛び出したりするような箇所もなく、全体形状も視野に入れて構築されている。

### (2) 遺物（第7図）

近世以降の出土遺物は薩摩焼の擂鉢と古銭が出土した。

4は苗代川系薩摩焼の擂鉢である。口縁部は外側に折り返して、弱い2条の突帯をつくる。内面の擂り目は細くシャープで、口縁部下位に余白を残す。18世紀前半の資料と思われる。

5は古銭である。3枚の寛永通寶が密着した状態である。

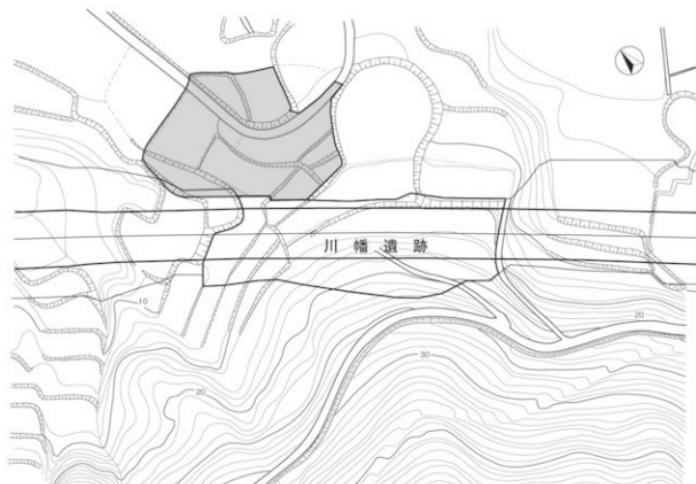
挿図 番号	掲載 番号	出土区	層位	種別	分類	器種	産地	法量(cm)		粘土の 色調	釉薬の種類 色調	施釉部位	時期	備考
								口径	底径					
第7図 4	B-4	II	陶器	鉢	擂鉢	薩摩焼 苗代川系	—	—	—	暗灰黄色	鉄釉	口唇部輪 剥落	18世紀 前半	

挿図 番号	掲載 番号	取り上げ 番号	出土区	層位	種別	名称	法量(cm)		重さ(g)	備考
							長径	幅		
第7図 5	—	一括	A-8	II	古銭	寛永通寶	2.6	0.4	983	古寛永通寶3枚

## 第5節 総括

川幡遺跡は川内川下流左岸から約1.5km南の標高約12~20mの丘陵地の北斜面に立地している。この斜面は19世紀後半頃から棚田や畑として利用されており、現在は休耕地となっているものの、当時構築された石垣が良好な状態で現存している。しかしこのため、遺構や遺物等が消失してしまい、僅かにB-4・5区で9世紀代と考えられる須恵器の壺と土師器片の総数42点の出土をみるに止まった。この出土点数では残念ながら本遺跡の性格について述べることはできない。

また遺跡の残存状況としては、棚田が作られる前の本遺跡から南~南東方向に隣接する畑に広がっていることが、土師器・須恵器・青磁等がこのあたりで表採されていることで推測できる。



遺跡の残存状況図

# 写 真 図 版

図版 1  
川骨遺跡



遠景



近景